5 どんな活動をしているのでしょう。

一例を紹介します

① ねやがわクリーンデー

日曜日の活動にもかかわらず多数の人が参加してくれました。七中の敷地内や周辺の通学路の清掃に取り組みました。とてもまじめに無言で草引きをしていました。「初めてボランティア隊に参加しました。うまく言えないけど、なぜかすごくいい気持になりました。」との感想が聞けました。

② 校内のポスター掲示

校内に掲示している環境浄化ポスターを、七中祭で展示発表した後に校内に貼り直します（**こういう小さなボランティアこそ七中ボランティア隊の真骨頂なのです**）。指示をよく聞きながら、キビキビと作業に取り組んでくれました。みんなとても気持ちのいい顔で作業していたのが印象的でした。「単純な仕事だけど、友達と一緒にやってとても楽しかったです。」との感想が聞けました。

③ 堀溝小学校「堀っ子雪あそび」お手伝い

堀溝小学校で行われた「堀っ子雪あそび」に14名が参加しました。小学生と一緒に遊んであげるのが主な仕事ですが、準備や片付けもお手伝いしました。

参加理由がおもしろく、「小学生の弟や妹が参加するので一緒に行ってあげる」「小さな子どもたちと一緒に遊びたい」「自分も雪あそびが大好き」など様々でした。参加した生徒たちの感想を紹介します。

「小学生の元気がありあまっていて、とてもにぎやかでした。」「雪合戦をしました。小学生に本気で当てられて痛かった！自分も投げ返したけど、優しく投げました。」「小学生と中学生がいっしょに盛り上がれて、とてもいいイベントだったと思います。」

大人に成長した中学生たちの姿です。

④ 寝屋川市社会福祉協議会からのインタビュー

七中ボランティア隊が発足した経緯や、これまでの活動について説明をしました。また、ボランティアをする意義やうれしかったことなど一人ひとり感想を述べました。その中で、「自分自身が満足し充実した気持ちになった。他人の役に立つことで、自分の存在意義を感じることができる。」や「ボランティア活動は、新しい友達や共感する人々とのつながりを築く機会です。共通の目的を共有することで、友達と更に仲が良くなった。」などの意見がでました。また、「他の人に感謝され、嬉しい。自分のしたことで褒められることで、やりがいを感じることができる。」などの意見が出ました。

⑤ 南小「逃走中」ハンター役

南小学校では、毎年「逃走中」を行っています。逃走中とは「追いかける者」（ハンター）と「逃げる者」（ランナー）の2チームに分かれて行う鬼ごっこのことで、中学生にはハンター役をやってもらいます。ランナー（小学生）は特定の時間内に目的地に到達しなければなりません。また、ハンター（中学生）はランナーを捕まえるためにさまざまな手段を使います。これまでも、小学生から大好評を得ています。

⑥ ふれあいフェスタ

53団体による発表・展示があるふれあいフェスタ。「プログラミング技術」や「天ぷら油でリサイクル」など様々な体験ブースと「チョークアート」や「南海トラフ地震の備え」など展示ブースに分かれます。

そして、各ブースでの運営スタッフを募集しています。当日は、資料の配布やゲームのお手伝いなど多種多様なお手伝いができます。秋の一日「ふれあいフェスタ」に立ち寄って、大人たちの空気感を味わってみませんか。

後　記

サービスラーニングは単なるボランティア活動とは違って、活動や体験が終われば完結するものではありません。活動のあとに「**振り返り**」という学習があり、自分の体験から得た学びを、自らの力にしていくことが特に大切なのです。**選択→体験→交流というステップ**の中で、**人の役に立つという喜び**を体得して欲しいのです。それが大人への成長につながります。

〈参考〉
- 「ボランティア白書」 日本青年奉仕協会（1999）
- 日本福祉大学Webページ 「サービスラーニング」
- 生徒指導のリスクマネジメント　阪根健二編著　学事出版（2020）

〈作成〉 田中 雄也 ／ 〈助言〉 大林 正史

〈発行〉 鳴門教育大学教職大学院 阪根健二研究室（2023年度作成）

（この資料は、鳴門教育大学大学院遠隔教育プログラム「教育実践研究Ⅰ」の成果物です。）

ネット時代に対応する新たな視点

国立大学法人 鳴門教育大学 Naruto University of Education

自らの力と意志で解決するために

―サービスラーニングを視点に―

本リーフレットは、寝屋川市立第七中学校中西寿彦校長の学校構想の基、田中雄也教頭（大学院在籍）が、同大学院阪根健二特命教授（名誉教授）の指導の下に作成したものです。ここでは、昨今課題になっている「いじめやネット問題」（生徒指導の課題）を、新たな視点で解消していこうとする方策として、その理論と実践手法を紹介しています。

※写真はイメージです

1 ネット時代にどう生きていくのか

▲ 寝屋川市社会福祉協議会と七中生

現代社会は、『私事化（privatization）社会』であり、「公（集団）から私（個人）へ」という流れが主流となっています。そこに新たな問題が「重複性（multi problem）」をもって、複雑に絡み合っているのです。こうした時代では、過去からの慣習や古典的な対応では対応できないことが多く、新たな視点が必要となってきました。そこで、子どもたちには「**将来の展望を持ちつつ、新たな社会の地平を見据える作業**」が必要なのです。

ここでは『**サービスラーニング**』という考え方を紹介したいと思います。それは、「社会活動を通して“**市民性（citizenship）**”を育む学習」です。サービスラーニングという聞き慣れない言葉ですが、ボランティア活動と混同されがちです。ボランティアは自発的な活動である一方、サービスラーニングは、あくまでも教育活動の一環であり、ボランティア活動の経験を学習として、責任ある社会人になる為に行う意図的な学習活動なのです。

児童生徒は“一市民”として、地域と結びつき、さまざまな職場や地域住民と協働することで、これまで見えなかった新しい広がりが生まれ、インターネットやSNSから得られる狭い意識や思い込みからの脱却をめざします。これこそが、ネット時代に生きる子どもたちに必要な力だといえます。

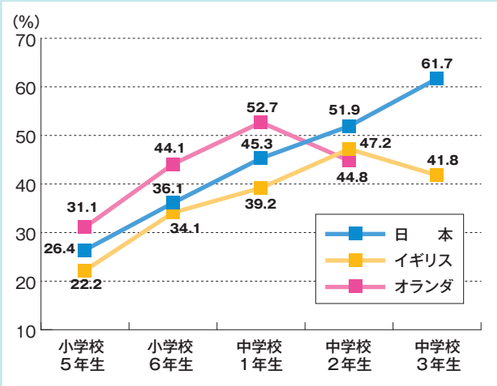
2 これまでの寝屋川市での実践から

児童生徒がいじめ防止に資する活動に主体的に関わっていくという「**子ども主導**」による取り組みが全国各地で行われています。

2007年度に大阪府寝屋川市内の全公立中学校生徒会が、自分たちを取り巻く様々な問題について話し合った「**寝屋川市中学生サミット**」は、その先駆けです。仕掛け人である兵庫県立大学竹内和雄教授（元寝屋川市立教員）は、本研究者の田中教頭を、鳴門教育大学大学院につないだ方であり、2013年度より実施された「全国いじめ問題子どもサミット（文科省）」では、阪根特命教授が助言・講演等を担当されました。

こうした取組は、いずれも「子ども中心」の活動であり、主体的に参加した個々の児童生徒の意識に一定の効果をもたらしました。しかし、各学校の代表があつまるサミットのような場では、意欲のある子ども同士の積極的な意見交流が見られても、各々が自身の学校で取り組みの成果をどう波及させるのかについては課題が残りました。そのため、周辺の児童生徒への積極的な働きかけが必要であるといえます。そのためにも「**学校間関連（特に小中連携）や地域連携**」が欠かせないのです。

3 市民性教育に着目する



▲ 図「傍観者」の出現率の学年別推移

市民性教育は、自己理解・自己構築に結びつくものであり、ネット時代において規準や基準が見えなくなった今こそ必要な資質であるといえます。社会にベクトルを向け、他者と関わりながら自己を構築していくことに価値観を見い出せない子どもたちにとって、広く社会に目を向けさせ、自分以外の様々な他者と交流していく市民性育成が重要であり、そのための教育現場での仕掛けが待たれているのです。

左図は、故森田洋司先生（大阪市立大学名誉教授）が、いじめについて国際比較調査を行ったものの一部です。いじめ研究の過程で、阪根特命教授に教員啓発用として提供していただきました。この調査（日本（1996年から1997年に、日本の公立小5～中3・6,906人）、海外では、英・2,308人、蘭・1,993人、ノルウェー・5,171人の大規模調査）からは、これからの生徒指導の在り方に大きな示唆を与えてくれます。つまり、日本（青い線）は、年齢が上がるたびに『**傍観者**』が増加しているのです。一方、外国では、中学校を境に傍観者が減少しています。小学校から行われる市民性教育の成果が実を結んだのです。つまり“**大人**”になるのです。いじめにおいても、ネット問題においても、健全な大人に成長するにつれ、その解消方法を意識できるようになり、リーダーたちと共に“正しい判断”ができるといえるのです。これこそが生徒指導の本質です。

4 地域とともに！七中ボランティア隊

七中ボランティア隊は、2018年度に発足しました。誰でも、気軽に、何度でも参加できるボランティア活動で、地域の身近な人助けやお手伝いがメインです。「なんとなく気が向いたから」「時間があるから」「今回は自分にもできそう」、そんなきっかけで参加してほしいと思っています。これまでに先輩が残してくれた実績があり、地域の方からも感謝をいただいています。コロナも落ち着き、今年度も七中にはたくさんの依頼が届いています。

「**七中生ありがとう**」と地域から信頼される学校をめざして活動しています。